昭和五十三年

日本思想史関係研究文献要目

凡例

一、本要目には、昭和五十三年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。

一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録　Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

Ⅰ・Ⅱ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道徳教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著者名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総雑

日本思想史講座 別巻2 研究方法論　石田一良・古川哲史編　雄山閣出版
日本思想の分水嶺　勝部真長　勁草書房
日本的自然観の研究 上・下　斎藤正二　八坂書房
日本文化史　結城陸郎　明玄書房
日本民族文化の起源1・2・3　松本信広　講談社
道の思想（叢書 身体の思想1）　寺田透　創文社
茨城県の思想・文化の歴史的基盤　地方史研究協議会編　雄山閣出版
日本教育思想史の研究　井上義巳　勁草書房
日本仏教教育史研究 上代・中世・近世　斎藤昭俊　国書刊行会
日本民衆教育史研究　高橋敏　未来社
日本人の宗教心意　安津素彦　桜楓社
日本人の精神史と宗教　関根文之助　川島書店
日本における国家と宗教　下出積与博士還暦記念会編　大蔵出版
方違神社 研究と資料　植垣節也　皇学館大学出版部
神々と村落 ―歴史学と民俗学との接点　萩原龍夫　弘文堂
国家と宗教 「靖国」から「津」、そして大嘗祭へ　靖国神社問題特別委員会編　日本基督教団出版局
祭祀概説　川出清彦　学生社
修験道　宮家準　教育社
神観の研究 小田切信男博士感謝記念論文集　酒枝義旗・野呂芳男編　創文社
祖先祭祀の研究（日本民俗学研究叢書）　近藤喜博　弘文堂
大嘗祭の研究　皇学館大学神道研究所編　皇学館大学出版部
日本神道史研究 1・2・3・4・7・8・9・10　西田長男　講談社
比叡山寺 その構成と諸問題　景山春樹　同朋社
概説浄土宗史 補訂版　恵谷隆戒　隆文館
真宗教団展開史　笠原一男　ピタカ
漂泊 日本的心性の始原　中西進　毎日新聞社
源豊宗著作集 日本美術史論究1 序説　源豊宗　思文閣出版

古代

記紀論 国学的古事記観の克服　梅沢伊勢三　創文社
古事記の世界　川副武胤　教育社
古代思想の研究　重松信弘　皇学館大学出版部
道教と古代の天皇制 日本古代史・新考　福永光司・上田正昭・山上春平　徳間書店

斑鳩の白い道のうえに　聖徳太子論　上原和　朝日新聞社
宇佐　大陸文化と日本古代史　賀川光夫編　吉川弘文館
古墳と古代宗教　重松明久　学生社
陰陽五行思想からみた日本の祭　伊勢神宮祭祀・大嘗祭を中心として　吉野裕子　弘文堂
応神天皇と三皇子　八幡神の由来　大城戸忠　東海大学出版会
聖徳太子御製法華義疏の研究　花山信勝　山喜房仏書林
弘法大師研究　中野義照編　吉川弘文館
最澄と天台教団　木内堯央　教育社
神祇信仰の展開と日本浄土教の基調　宮井義雄　成甲書房
1上代日本の宗教と祭祀　〃　〃
2律令貴族藤原氏の氏神・氏寺信仰と祖廟祭祀　速水侑　雄山閣出版
浄土信仰論　藤井智海　平楽寺書店
往生要集の文化史的研究　中村啓信　桜楓社
日本神話　原田大六　三一書房
雷雲の神話　桂芳久　三弥井書店
水と火の伝承　古代日本文芸文化試論　目崎徳衛　吉川弘文館
王朝のみやび　田村円澄　黄寿永編　吉川弘文館
百済文化と飛鳥文化　久野健　六興出版
白鳳の美術　斎藤孝　創元社
日本古代と唐風美術

中世

無縁・公界・楽　中世日本の自由と平和　網野善彦　平凡社
戦国時代武家家訓の研究　近藤斉　風間書房
法然と浄土宗教団　大橋俊雄　教育社
法然と親鸞　石田瑞麿　秋山書店
わたしひとりの親鸞　古田武彦　毎日新聞社
歎異抄の思想的解明　寺川俊昭　法蔵館
歎異抄の諸問題　広瀬杲　法蔵館
新鸞と蓮如　笠原一男　評論社
明恵　遍歴と夢　奥田勲　東大出版会
一遍と時宗教団　大橋俊雄　教育社
道元　山折哲雄　清水書院
日本の禅語録　4義雲　篠原寿雄　講談社
5瑩山　田島柏堂　〃
6大燈　平野宗浄　〃
8五山詩僧　玉村竹二　〃
9大智　水野弥穂子　〃
12一休　加藤周一　柳田聖山　〃
西行の思想史的研究　目崎徳衛　吉川弘文館

中世隠者文芸の系譜　広畑　譲　桜楓社
続さんせう太夫考　説経浄瑠璃の世界　岩崎武夫　平凡社
鎌倉文化　川添昭二　教育社

近世

日本近世の思想と文化　奈良本辰也　岩波書店
角倉素庵　林屋辰三郎　朝日新聞社
広瀬藩儒山村勉斎覚書　山村良夫　飯塚書房
安藤昌益の闘い　寺尾五郎　農山漁村文化協会
安藤昌益と中江兆民　安永寿延　第三文明社
三浦梅園の研究　田口正治　創文社
本居宣長　本山幸彦　清水書院
本居宣長　相良亨　東大出版会
宣長の青春　京都遊学時代　出丸恒雄　光書房
山県大弐伝　飯塚重威　三井出版商会
伊能忠敬　小島一仁　三省堂
箕作阮甫の研究　蘭学資料研究会編　思文閣出版
叢書日本の思想家
4　中江藤樹・熊沢蕃山　木村光徳　牛尾春夫　明徳出版社
8　山鹿素行　佐佐木杜太郎　〃
33　帆足万里・脇愚山　帆足図南次　〃
35　広瀬淡窓・広瀬旭荘　工藤豊彦　〃
42　日田蒙斎・楠本端山　難波征男　岡田武彦　〃
尊徳の実践経済倫理　内山稔　高文堂出版社
近世民衆教育運動の展開　津田秀夫　御茶の水書房
藩校と寺小屋　石川松太郎　教育社
赤穂四十六士論　田原嗣郎　吉川弘文館
土佐勤王党始末　武市半平太と山内容堂　嶋岡晨　新人物往来社
近世法華仏教の展開　宮崎英修編　平楽寺書店
近世往生伝の世界　笠原一男編著　教育社
隠元・木庵・即非　高橋竹迷　国書刊行会
白隠　吉田紹欽　木耳社
日本の禅語録　3　大応　荒木見悟　講談社
13　沢庵　市川白弦　〃
18　卍山・面山　鏡島元隆　〃
20　良寛　入矢義高　〃
日本近世文苑の研究　宗政五十緒　未来社
幕末文化の研究　林屋辰三郎編　岩波書店

近代

近代日本政治思想史　河原宏他　有斐閣
近代日本の思想　宮本盛太郎　河原宏　堀真清　有斐閣

近代日本の民衆運動と思想　鹿野政直他　有斐閣
明治思想史　儒教的伝統と近代認識論　渡辺和靖　ぺりかん社
明治・思想の実像　坂野潤治　創文社
中江兆民の世界　山本安英の会編　筑摩書房
西田幾太郎の哲学　増補改題・日本型思想の原像　山田宗睦　三一書房
廃仏毀釈　柴田道賢　公論社
学校令の研究　倉沢剛　講談社
北一輝　渡辺京二　朝日新聞社
天皇観の相克　1945年前後　武田清子　岩波書店

II　雑誌・紀要論文目録

総雑

日本文化論の歴史　鹿野政直　史学雑誌　八七―三
日本文化研究における「比較」の問題点　源了圓　理想　五三九
思想史の方法を模索して　―一つの回想　丸山真男　名古屋大学法政論集　七七
日本文明史の時代区分について　石田一良　文明　二二
時代区分にかんする一考察　大谷瑞郎　論集（武蔵大）二六―三・四
天皇なる称号の由来について　宮崎市定　思想　六四六
天皇号論　角林文衛　ヒストリア八〇
沖縄における王権の宗教的性格　知名定寛　龍谷史壇　七六
血穢とケガレ――日本人の宗教意識の一面　宮田登　『日本における国家と宗教』
悪人往生思想の系譜　笠原一男　〃
道と庶民信仰　木村至宏　尋源　三〇
神と仏――かみとほとけの接点　箱山貴太郎　千曲　一九
結界について――一――日本的境界標示装置　垂水稔　国立民族学博物館研究報告　三―一
対馬の天道と海神　真弓常忠　皇学館大学紀要　一六
キリスト教と日本宗教との交渉総説　海老沢有道　季刊日本思想史　六
歴史学の方法と文学　西川長夫　歴史学研究　四五七
文化の重層と芸術――その史的考察より　仲井間憲児　特定研究紀要（琉球大学）一
文学と史学――上・下――　亀井秀雄　文学　四六―四　四六―五
皇学館大学神道研究所編『大嘗祭の研究』を読む　森田康之助　神道史研究　二六―二
西田長男著『日本神道史研究』第一巻　総論編　柴田実　国学院雑誌　七九―六
桜井徳太郎著『日本のシャマニズム』下巻　藤井正雄　日本仏教史学　一三

古代

憲法十七条について　宮田俊彦　聖徳太子研究　一二

奈良時代前期の大学と律令学　早川庄八　万葉集研究　七

平安初期大学教育史における紀伝・文章道の発達と『政治経済史学』の源流（Ⅱ）　彦由一太　政治経済史学　一五〇

三種の神器について　黛弘道　『日本古代史論叢』　上

倭王朝の体制と理念―祭祀と神話と氏族（覚書）―　川副武胤　『日本古代の社会と経済』　上

祝に関する一試論―日本古代国家の成立史にふれて―　杉崎美智子　史艸（日女大）　一九

神祇官成立の一側面―祝・祝部を中心に―　西宮秀紀　続日本紀研究　一九七

平安時代の革命・革令勘文の勘申者　佐藤均　史正　五・六

『御堂関白記』と儀式行事　山中裕　『続律令国家と貴族社会』

大殿祭と安鎮法　安江和宣　皇学館論叢　一一―五

黄泉国考―古代出雲の考察―　熊谷春樹　国学院雑誌　七九―五

大年神の系譜―上―　堀内秀晃　東京医科歯科大学教養部研究紀要　八

天神・国神考―併せて天神地祇・天社地社等のこと―　川副武胤　『日本古代史論叢』　上

月次祭試論―神今食の成立を巡って―　黒崎輝人　日本思想史研究　一〇

大嘗祭国郡卜定の儀について―特にその執行の年・月・日を中心に―　今江広道　国学院雑誌　七九―一二

日本神話における化生神について　村崎真知子　古代文化　三〇―五

平安期における神祇信仰の展開―政治史との関連において―　森田悌　金沢大学教育学部紀要　人文・社会・教育科学編　二六

護法善神と日本霊異記　久保田実　駒沢国文　一五

安徳天皇の大嘗祭　鎌田純一　神道史研究　二六―四

続日本紀の祈雨記事について　高橋渡　『歴史学論文集』（日大）

欽明朝仏教公伝について―公伝年時を中心として―　松木裕美　紀要（東京女学館短大）　一

聖徳太子の仏教思想　伊藤瑞叡　法華文化研究　四

法華義疏の特徴　望月一憲　聖徳太子研究　一二

古代における山岳信仰と仏教　下出積與　『日本における国家と宗教』

「上代仏教思想史研究」の象嵌　佐伯真光　大倉山論集　一三

奈良朝の阿弥陀悔過（上）—東大寺蔵『阿弥陀悔過料資財帳』の一考察— 竹居明男 古代文化 三〇—九
〃（下） 〃 三〇—一〇
観音霊験譚の変容—長谷寺験記を中心として— 加藤純 国文学論考 一四
『日本霊異記』における「聖霊」の観念 八重樫直比古 ノートルダム清心女子大学紀要文化学編二—一
Characteristics of the Nihonryoiki and the Auther Kyokai Zensho Akira Asaeda 国史学研究（龍谷大） 四
円仁と円珍との関係についての一試論 小山田和夫 日本仏教 四七
藤原良相と仏教—崇親院を中心として— 小山田和夫 政治経済史学 一四一
死のための団体形成—源信とその同志たち— 山折哲雄 宗教研究 五二—一
源平二氏の性格について—特に仏教信仰との関係を中心に—（上）（下） 伊野部重一郎 政治経済史学 一四七・一四八
薬猟と『本草集注』—日本古代の民間道教の実態— 和田萃 史林 六一—三
古代日本文学と時間意識—承前—時間と時間を超えるもの— 永藤靖 文芸研究明治大学文学部紀要 三九
文化史における七世紀と歌謡・和歌 蔵中進 日本文学 二七—六
古事記と日本書紀—地名起源説話を中心として— 西川順土 紀要（皇学館大） 一六
「記」「紀」にみえる巨木伝承—その展開と定着— 青木周平 上代文学 四一
国譲り神話について 宇野幸雄 歴史論集（生江義男先生還暦記念）
大国主神の「国譲り」神話について—学説回顧的検討— 伊野部重一郎 神道学 九六
「古事記」の神話叙述—神名列挙の方法— 神野志隆光 日本文学 二七—四
浦島伝説の性格とその変貌 重松明久 日本歴史三六七
万葉集の「時」 桑川光樹 フェリス女学院大学紀要 一三
空海の「あや」以前—素材史の一面— 小島憲之 文学 四六—五
怨みと鎮魂—源氏物語への一視点— 日向一雅 東京女子大学論集 二九—一
宇治十帖への一視点—「家」観念と「恥」の契機を軸として— 〃 〃 二八—二
日本古代六道絵史論序説—その思想的背景の多様性— 竹居明男 文化学年報二七
日本書紀と藤原不比等（下） 黛弘道 歴史手帖六—一
行基研究史ノート—行基論の基本構造をめぐって— 福岡猛志 日本福祉大学研究紀要 三六

平安末朝での思考方法の転回について　龍福義友　『続荘園制と武家社会』皇学館論叢　一一—四
重松信弘著『古代思想の研究』　西宮一民
池田源太『奈良・平安時代の文化と宗教』　朝枝善照　龍谷史壇　七五
〃　戸田秀典　史林　六一—五
〃　松田智弘　国史学研究（龍谷大）　四
〃　泉谷康夫　古代文化　三〇—一〇
〃　森田康之助　神道学　九九
真弓常忠『日本古代祭祀の研究』　西宮一民　皇学館論叢　一一—六
重松明久『古墳と古代宗教』　佐竹昭　史学研究一四二
西郷信綱『神話と国家　古代論集』　中西進　文学　四六—一
黒沢幸三著『日本古代の伝承文学の研究』　多田一臣　国語と国文学　五五—一〇
平野仁啓著『続古代日本人の精神構造』　粂川光樹　国語と国文学　五五—三
速水侑著『平安貴族社会と仏教』　薗田香融　日本歴史　三五六
上山春平著『仏教思想の遍歴—空海から親鸞へ—』　土橋恭秀　文明（東海大学）　二三

中世

十訓抄と北条重時の家訓—作者湯浅宗業の環境　永井義憲　大妻女子大学文学部紀要　一〇
イエズス会学校の科学技術教育　小山田了三　科学史研究　一二七
石清水放生会の国家的位置についての一考察　伊藤清郎　日本史研究　一八八
『神皇正統記』著作対象に関する一考察　白山芳太郎　皇学館大学紀要　一六
神皇正統記著作の目的について—学説の展開とその批判　平田俊春　芸林　二七—二・三
十五世紀後半における公家の社会観—中院通秀とその周辺　板野哲　新居浜工業高専紀要（人文科学）
室町時代における祈禱と公武統一政権　富田正弘　『中世日本の歴史像』
合戦と追捕(一)—中世法と自力救済再説—　石井紫郎　国家学会雑誌　九一—七・八
法然の宗観念について　金子寛哉　日本仏教　四四
法然浄土教における伝統と自証について—特に観経疏を中心として　坪井俊映　親鸞教学　三二
聖冏の著作と思想について　服部淳一　日本仏教　四四
親鸞の信心仏性説とその思想史的位置づけについて—1—　高橋功　富士大学紀要　一〇
初期真宗と神の問題　中根和浩　『日本における国家と宗教』

親鸞における「自然」　仁科弘　鹿児島短大研究紀要　二一

親鸞の他力思想　二宮嘉須彦　日本思想史学　一〇

中世真宗の神祇思想―「諸神本懐集」を中心として　普賢晃寿　竜谷大学仏教文化研究所紀要　一七

親鸞系図の史料批判　古田武彦　龍谷史壇　七三・七四

一遍の遊行支持層と拠点設定について　阿部征寛　三浦古文化二四

時宗における宗観念の展開　今井雅晴　日本仏教　四六

一遍智真の武士観　林譲　〃

一遍の宗教の歴史的性格(2)―鎌倉旧仏教の神祇観との対比　広神清　筑波大学哲学想想系論集（昭和五十二年度）

「真禅融心義」に説かれる栄西の密禅併修　中尾良信　駒沢大学曹洞宗宗学研究所・宗学研究　二〇

栄西研究―3―栄西の「出家大綱」をめぐって　古田紹欽　禅文化研究所紀要　一〇

「瑩山和尚清規」にあらわれた道元禅師の影響　東隆真　駒沢大学曹洞宗宗学研究所・宗学研究　二〇

随聞記―道元に於ける〝自然〟―自然法則的自然と如法的自然について　有福孝岳　日本及日本人　一五四八

「正法眼蔵」にみられる臨済批判　伊藤秀憲　駒沢大学曹洞宗宗学研究所・宗学研究　二〇

道元と如浄―5―「如浄禅師語録」到来を中心に　伊東洋一　文経論叢　一三

道元における坐禅の意義について　倉沢幸久　日本思想史学　一〇

道元の護国思想について　船岡誠　『日本における国家と宗教』

室町・戦国時代の禅宗寺院と尼崎―通玄寺領潮江荘と難波村を中心に　田中勇　地域史研究　八―二

中世禅宗における義雲の立場　原田弘道　駒沢大学仏教学部研究紀要三六

日蓮聖人引用経典の一考察　小松邦彰　研究年報・日蓮とその教団　三

日蓮と天皇（下）―国主観との関連で―　佐々木馨　日本仏教　四五

初期日蓮の国家観―鎌倉旧仏教との比較において―　佐藤弘夫　日本思想史研究　一〇

鎌倉仏教における国土の意識―日蓮を中心に　高木豊　『日本古代史論叢』下

『立正安国論』と『妙法治世集』―中世日蓮僧の政治理念　〃　『日本における国家と宗教』

日蓮のめざす究極者　玉城康四郎　研究年報・日蓮とその教団　三

『元亨釈書』の原史料―特に『扶桑略記』について　黒川訓義　神道史研究　二六―四

称名寺と宋代浄土教―性仙の「観経疏管見鈔」を中心として　日置孝彦　金沢文庫研究　二四

明恵上人の講義の聞書にみえる譬喩　田中久夫　日本歴史三五八

叡尊の国家観―関東下向と蒙古襲来をめぐって　中尾堯　『日本における国家と宗教』

俊乗坊重源の宗教的系譜　〃

中世の神祇思想と専修念仏　今堀太逸　『日本古代史論叢』下　仏教史学研究二一―二

中世初期神道の形成―『中臣祓訓解』・『記解』を中心に―　岡田荘司　日本思想史学一〇

八幡縁起の展開―八幡宇佐宮御託宣集を読む　桜井好朗　思想六五三

形成期伊勢神道の一考察―外宮祭神論を中心として―　高橋美由紀　東北大学日本文化研・研究報告一四

『類聚神祇本源』について　渡部吉信　法政大学・史路

中世寺院縁起の特質　逵日出典　京都精華学園研究紀要一六

「吾妻鏡」と中世文学―梶原景時の場合　亀田帛子　津田塾大学紀要一〇

『発心集』から『方丈記』へ　貴志正造　国語と国文学五五―三

平家物語と法然義　佐々木八郎　学苑四六二

中世日本における文化的・政治的統合―文化運搬者としての連歌師宗祇をめぐって（非国家的行為体と国際関係）　平野□健一郎　季刊国際政治五九

無住と兼好　松下道夫　季刊文学・語学八二

救済の文学平家物語　間中富士子　鶴見大学紀要第1部国語国文学編一五

文芸・絵画における美意識の展開―日本史の峠〝中世〟よりの展望　片野達郎　季刊日本思想史九

弥陀信仰と六道絵―地獄変から二河白道図への展開　成田俊治　仏教大学・人文学論集一二

茶の湯における美意識―すき・わび・やつし　熊倉功夫　季刊日本思想史九

花・位・幽玄―世阿弥の能楽芸術論　西尾陽太郎　西南学院大学文理論集一八

能における季節の問題―「文化」としての「季」　堀越善太郎　東海大学紀要文学部二九

笠原一男『親鸞と蓮如―その思想と行動』　内藤範子　日本女子大学・史艸一九

辻彦三郎著『藤原定家明月記の研究』　村山修一　史学雑誌八七―二

佐藤正英著『隠遁の思想―西行をめぐって』　目崎徳衛　史学雑誌八七―四

時衆関係研究文献分類目録　長島尚道　大正大学研究紀要文学部・仏教学部六三

近世

幕藩制国家と天皇―寛永期を中心に　深谷克己　『幕藩制国家成立過程の研究』

幕藩制期のイデオロギー的基盤—擬制的氏族制の問題を中心に　宮沢誠一　『幕藩制国家成立過程の研究』　国学院大学日本文化研究所紀要　四一

幕末に於ける主権　藤井貞文　〃

日本の攘夷　長尾久　社会運動史　七

鳥居忠耀「晩年日録」—その流謫中の生活を中心に　松島栄一　東京大学史料編纂所報　一二

島津斉彬小論—外様系一橋派大名の政治意識　山口宗之　歴史学・地理学年報（九大・教養）　二

井伊大老初政期の政治史的考察—井伊大老論—　山口宗之　日本歴史三五九

『仮名性理』の成立に関する一試論—『滝川心学論』を媒介として　山本眞行　日本思想史学　一〇

大村由己と藤原惺窩　庵逧巌　日本歴史三六五

藤原惺窩の思想　源了圓　文化　四二—一・二

藤原惺窩と林羅山—近世初頭の学芸　〃　文芸研究（日本文芸研究会）　八七

俞曲園と邦儒との文化的交流管見　藤川正数　東洋文化　四四・四五

土佐南学濫觴の虚実　下村効　歴史手帖六—三

山崎闇斎における秘伝の意味　谷省吾　皇学館論叢　一一—四

浅見絅斎と奥正尹　近藤啓吾　東洋文化　四四・四五

読風葉集説について—若林強斎の神道説の転回と山口春水　〃　神道史研究　二六—三

若林強斎の『大学』講説　〃　芸林　二七—一

徳川光圀の政治思想　栗原茂幸　東京都立大学法学会雑誌　一八—一・二

中江藤樹と「藤樹先生子弟訓」とその種々相儀　小野正康　日本大学理工学部一般教育教室彙報　二三

中江藤樹の「致良知」について　田中佩刀　明治大学教養論集　一八

熊沢蕃山の経世済民の思想—その基本的構成と社会的機能　佐久間正　日本思想史研究　一〇

山鹿素行の思想について(1)—謫居童問を中心として(2)　石川正一　〃　一二—二

日本における実学運動の展開—二—古学派の実学観—10—伊藤仁斎の実学観とその哲学　源了圓　心　三一—二

—二三—　〃　〃　三一—五

—戴震と伊藤仁斎—上—11　〃　〃

—二四—　〃　〃　三一—六

—中—12

日本における実学運動の展開—二五—古学派の実学観—13—戴震と伊藤仁斎—下— 源了圓 心 三一—七
戴震と日本古学派の思想—唯気論と理学批判論の展開 岡田武彦 文理論集（西南学院大） 一八—二
近世儒学思想における教育の問題—伊藤仁斎の場合 辻本雅史 日本史研究 一九一
伊藤仁斎の経書批判—「三書古義」から「春秋経伝通解」へ 三宅正彦 季刊日本思想史 八
活物的世界における聖人の道—荻生徂徠の場合 黒住真 倫理学年報二七
徂徠学における「道」の様態 〃 日本思想史学 一〇
徂徠「論語徵」について—二— 山下龍二 名古屋大学文学部研究論集七五
聖門の禦侮—徂徠学の成立における孟子像の旋回 野口武彦 文学 四六—六
太宰春台の古文辞批判と文章論について 東郷富規子 季刊日本思想史 八
闘いの肖像—評伝新井白石—一二・一三・一四— 入江隆則 新潮 七五—二・三・四
読史余論の成立—その叙事のあり方について 安川実 神道学 九九
広瀬淡窓について 広瀬正雄 東洋研究 四九
三浦梅園（日本の思想—一九完—） 河野公平 前衛 四二二
帆足万里の教育思想—近世教育思想研究Ⅱ 鹿毛基生 紀要（大分大・教育） 五—三
日本における近代政治思想の祖型—佐藤一斎試論 高橋康昌 紀要（群馬大・教養） 一二
横井小楠における思想の歴史的性格 森藤一史 名古屋大学法政論集 七七
幕末にみる日本の国家構想について—横井小楠を中心として 佐々野昭弘 紀要（八代学院大） 一四
「新論」における国家観 前田光夫 茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学 二七
吉田松陰と蘭医青木研蔵—蘭学摂取の一過程をめぐって 大塚英明 『近代日本形成過程の研究』
『西遊日記』にみる吉田松陰の研究 片倉桂子 〃
近世合理主義とその神代巻批判 安川実 神道学 九六
古文辞の学と国学 今中寛司 季刊日本思想史 八
下河辺長流—国学の視点から見た人と学問 上田賢治 国学院大学日本文化研究所紀要 四一
賀茂真淵論 野崎守英 季刊日本思想史 八
本居宣長の「神の道」と「人の道」—その構造と性格について 渡部正一 〃 〃
本居宣長の思想形成—京都遊学時代を中心として 芳賀登 〃 〃
本居宣長—その教育学的側面 前野喜代治 人文学会紀要（国士館大） 一〇

『古事記伝』の方法—宣長の「常世」論について　平野豊雄　文学　四六—六
「物まなぶ者」の立場—宣長学の古道論について　榎本善紀　言語と文芸　八六
「古事記伝」における記紀観の実態　梅沢伊勢三　日本歴史三五七
本居宣長における政治と宗教—「上（かみ）」・「下（しも）」関係の型をめぐって　松本滋　聖心女子大学論叢　五一
「道迺佐喜草」は春庭の著に非ざること　尾崎知光　国語と国文学　五五—七
宣長と秋成—秋成の宣長学説批判について　鷲山樹心　花園大学研究紀要　九
上田秋成の想世界—2—　藤原暹　ノートルダム清心女子大学紀要　国語・国文学編　二—一
平田篤胤の顕幽論における実践性について　横地信芳　北大史学　一八
『解体新書』出版以前の西洋医学の受容　酒井シヅ　小川鼎三　紀要（日本学士院）　三五—三
平賀源内の転向と挫折　松下道夫　日本歴史三六三
渡辺華山覚書　荒川久寿男　皇学館大学紀要　一六
幕末和算家の近代的展開　坂本守央　『近代日本形成過程の研究』
近世初期学校教育の研究—岡山藩校を中心として　沖田行司　文化史学　三四
古河の教育史の一考察(二)—古河藩の学問、土井氏と盈科堂を中心として　渡辺武夫　古河市史研究三
藩政時代の褒賞制度について　倉石英雄　長野　七七
石田梅岩の心学と懐徳堂学派—利の思想の相違を中心に　藤井定義　大阪市史紀要　三六
石田梅岩の教学と神道　多田顕　神道学　九六
堵庵教学と仏教　高神信也　印度学仏教学研究　二六—二
心学教化思想の本質と堺「庸行舎」　石島庸男　山形大学紀要教育科学七—一
幕末期「堺」の教育構造と郷学所の位置　石島庸男　日本史研究　一九一
幕藩期女子教育論小考—良妻賢母主義教育の起点　中嶌邦　史艸（日女大）　一九
幕末維新期の寺小屋—美濃国山県郡高富村の習慣堂の場合　西村覚良　研究紀要（徳川林政史研究所）　五二年度
幕末・明治期の広島心学（下）—宮本愚翁の心学思想について　木京睦人　芸備地方史研究　一一六・一一七
ハビアンと「妙貞問答」　井手勝美　季刊日本思想史　六
ハビアン著「妙貞問答」に関する一考察—依拠・関連資料をめぐって　小林千草　国語国文　四七—五
キリシタンと神道との交渉　広瀬和雄　キリスト教史学　三二
転び伴天連トマス・アラキについて　高瀬弘一郎　史学（三田史学会）　四八—四

禁制下の宣教者の動向と長崎　五野井隆史　日本歴史三六一

近世仏教統制の一研究—異法義法度の実態と其の背景　菊池武　日本歴史三六五

房総における禁制不受不施派の人々　加川治良　千葉県の歴史一五

相良領における一向宗禁止令　種元勝弘　熊本史学五一

一向宗禁制と島津家の継承問題　桃園恵真　鹿大史学二六

近世浄土宗の布教統制と布教者の姿勢—いわゆる説教をめぐって　長谷川匡俊　『日本における国家と宗教』

鈴木正三の思想　藤吉慈海　禅文化研究所紀要一〇

近世初期の仏教復古運動—鈴木正三とその周辺　大桑斉　『日本における国家と宗教』

仰誓撰「妙好人伝」攷　土井順一　国文学論叢二三

初篇『妙好人伝』の一考察　朝枝善照　仏教史学研究二〇—二

関通における往生論と往生伝　大橋俊雄　『日本古代史論叢』下

日蓮宗批判史の一考察—松本鹿鹿と平田篤胤の関係　宮川了篤　日本仏教四五

近世真宗における神祇への対応　柏原祐泉　竜谷史壇七三・七四

檀家制の確立過程と真宗道場について　赤田光男　紀要（帝塚山短大）一五

享保期における村落共同体と祭祀問題　白川部達夫　立正史学四三

尾張藩主の津島神社崇敬について—源敬公徳川義直の崇敬を中心に　伊藤晃雄　郷土文化（名古屋）三三—一

商人家族の「家憲」について　玉城肇　愛知大学法経論集・経済・経営篇八八—一

白木屋の家訓・店則の変遷　大藤修　研究紀要（史料館）一〇

民衆史研究について　深谷克己　民衆史研究一六

江戸期農民の意識と農村指導者　青木美智男　歴史評論三四四

農民の儒仏神一如思想と生活　庄司吉之助　福大史学二四・二五

知的百姓・江渡狄嶺の思想　月館金治　季刊世界政経六四

「日光邯鄲枕」について—元禄・宝永期の民衆の社会・政治思想　山本詔一　専修史学一〇

尊徳研究における原典批判の問題—尊徳思想の正しい理解のために　内山稔　精神科学一七

小田原藩における報徳仕方について—とくに一村仕方の問題を中心に　長倉保　『幕藩制国家解体過程の研究』

地主経済の展開と報徳思想における「分度」の変容　青木猛　経済と法（専修大）九

幕末村方指導者の法意識 ―近世から近代へ―出羽国村山地方と聖悦・行誠　茎田佳寿子　明治大学刑事博物館年報　九

近世常総の民衆運動について―不二道を中心に　秋山高志　茨城県歴史館報　五

地域体系との関連でみた江戸明和期の〝御蔭参り〟の空間的拡散　杉浦芳夫　地理学評論　五一―八

百姓一揆物語の伝承とその世界像―土平治騒動記をめぐって　川鍋定男　歴史評論三三八

幕末の社会変動と民衆意識―慶応二年武州世直し一揆の考察　近世村落史研究会　歴史学研究　四五八

草莽出身の尊攘志士興野道甫とその学問―新史料の紹介をかねて　鈴木暎一　茨城史林　七

「草莽の国学」の再検討―宮負定雄を中心に―　岸野俊彦　歴史評論三三八

紀州藩平田派国学者三沢明の思想的特徴　岸野俊彦　研究紀要（名古屋自由学院短大）一〇

平田篤胤と民衆の接点―祖先崇拝の世界観―　堀口節子　竜谷史壇　七三・七四

元治期における尊攘派農民の動向について―常陸国久慈郡町田地方を中心として　圷拓男　茨城史林　七

江戸文化における虚像と実像　西山松之助　日本常民文化紀要（成城大）四

西鶴と知足　森川昭　ビブリア　天理図書館報　六八

金碧障壁画から文人画へ　笠井昌昭　季刊日本思想史　九

歌舞伎の美意識　西山松之助　〃

然び・佗び・撓り―芭蕉美学を中心として　河野喜雄　〃

粋と伊達の美学―近世的美意識の一系譜　松田修　〃

化政期の文学的原質をもとめて―世の中は地獄の上の花見かな　高田衛　日本文学　二七―四

虚実皮膜論の現象学的考察上・下　前川知賢　中京大学教養論叢　一九(1)・(2)

信州松代藩佐久間象山の和歌について―歌風の特色と和歌観の考察　土屋正晴　東洋研究　四九

江戸後期の詩と宋詞　富士川英郎　文学　四六―六

衣笠安喜著『近世儒学思想史の研究』　三宅正彦　日本史研究　一八八

近世儒学思想史の若干の問題―三宅正彦氏の書評にこたえて―　衣笠安喜　日本史研究　一九二

近世思想史の方法について―衣笠安喜著『近世儒学思想史の研究』によせて　本郷隆盛　歴史評論三三八

吉川幸次郎著『本居宣長』　大久保正　文学　四六―四

小林秀雄『本居宣長』批判　針生一郎　新日本文学　三三―四

小林秀雄『本居宣長』を読む—本書は歴史学の批判であり、同時に歴史的理性批判である　山口昌男　中央公論　九三—二

北岡四良著『近世国学者の研究』　美山靖　皇学館論叢　一一—一

〃　足立巻一　文学　四六—六

中川経雅著『氏神まうでの記』　谷省吾　皇学館論叢　一一—三

西垣晴次氏の『神々と民衆運動』によせて　大浜徹也　日本仏教　四五

横山十四男著『百姓一揆と義民伝承』　青木虹二　社会経済史学　四四—二

林屋辰三郎編『幕末文化の研究』　塚本学　歴史評論三三八

中野三敏『近世新畸人伝』　宗政五十緒　国語と国文学　五五—一

近代

天皇制イデオロギーと「臣民」の形成—社会化機関としての学校・軍隊および神社　安部俊二　政治研究　二四・二五

岩倉使節団の西洋教育観察　石附実　季刊日本思想史　七

キリスト教と儒教との関連—明治時代を中心として　渡辺和靖　〃　六

明治期の天皇観—4—　坂田吉雄　産大法学　一二—一

近代天皇制をめぐる理論問題　芝原拓自　歴史学研究　四五三

近代天皇制の形成過程—2　下山三郎　東京経大学会誌　一〇六

英国留学時代の森有礼—その国家意識をめぐって—　犬塚孝明　人文学会雑誌（武蔵大）九—三

明治一〇年代の熊本における政治と教育　花立三郎　季刊日本思想史　七

パリ・コミューンと西園寺公望　藤井松一　日本史研究　一八五

日本における共和主義の原型—ルソー・兆民・諭吉　河野健二　展望　二三一

福沢諭吉のアジア観　今永清二　史学論叢（別府大）九

福沢諭吉研究ノート（二）　進藤咲子　論集（東京女子大）二九—一

「市民社会」と道徳—福沢諭吉を中心に—　河村望　人文学報（都立大）一三一

「脱亜論」の源流—「時事新報」創刊年に至る福沢諭吉のアジア観と欧米観　青木功一　新聞研究所年報　一〇

「文明論之概略」ノート—2—　正田庄次郎　北里大学教養部紀要　一二

『西洋事情』と福沢諭吉の政治経済思想—チェンバーズの経済書と福沢諭吉の思想形成　飯田鼎　三田学会雑誌　七一—五

明治10年代における東アジア政策論者としての福沢諸吉―その受け止められ方について　家近良樹　文化史学　三四

わが国における社会進化論および社会有機体説の発展―加藤弘之を中心として　堀松武一　東京学芸大学紀要第一部門教育科学　二九

加藤弘之の社会観　小畑隆資　名古屋大学法政論集　七七

中江篤介の「策論」一篇について　松永昌三　思想　六五〇

中江兆民の思想―その共感と反感の構造について―1　宮村治雄　東京都立大学法学会雑誌一九(1)

「東洋のルソー」中江兆民の誕生―「三酔人経綸問答」における「社会契約論」読解　井田進也　思想　六四九

中江兆民の世界をたずねて―兆民研究の最近の動向　松沢弘陽　社会科学研究　三〇―二

元田永孚と「君徳輔導」論―明治保守主義思想研究　沼田哲　文経論叢（弘前大・人文）一三―四

徳富蘇峰と有賀長雄におけるスペンサーの社会思想の受容―上―　源了圓　日本文化研究所研究報告　一四

秋田事件の新研究―民権運動最初の激化事件として―　猪股良夫　秋田近代史研究　二三

群馬県民権諸会の動向　丑木幸男　地方史研究　一五四

木下尚江におけるキリスト教社会主義の形成―その「懺悔」の分析　鈴木篤　立命館産業社会論集　二〇

婦人社会政治同盟の思想と行動―創立から一九〇五の秋まで　伊手康　早稲田政治公法研究　七

明治社会主義の農民問題論　牧原憲夫　歴史評論三三九

〝冬の時代〟前半の堺利彦―待機主義の論理と幾つかの蠢動―　荻野富士夫　日本歴史三六〇

「友愛会総同盟」運動における民主主義と社会主義―「友愛会」創立8周年大会を中心として―　飯田鼎　三田学会雑誌七一―三

第一次世界大戦中における労働者階級と労働者意識　〃　〃　七一―一

労働運動確立期における労働者意識の形成―平沢計七の労働運動観について―　川原崎剛雄　法政史論　五

月刊『平民新聞』の思想と運動―大杉と寒村の隔絶(一)―　荻野富士夫　民衆史研究一六

上杉慎吉における立憲主義観の転換―国家法人説排斥に至る思想過程　吉田博司　武蔵野女子大学紀要　一三

大正デモクラシーと知識人―米騒動と関連させて　芳賀登　『近代日本成立過程の研究』

立憲主義者田川大吉郎の思想と行動　成田龍一　紀要〈早大・院・文学研究科〉四

河上肇と無我愛運動　森竜吉　社会科学研究年報（龍谷大学社会科学研究所）九

政友会中堅少壮議員の意識と行動―満州事変前を中心に　千代田典士　一橋研究三―一

ファシズムと反ファシズム―一九三〇年代日本知識人の場合―　馬場修一　歴史学研究　四五三

日中戦争下の新聞―「世論」形成過程を中心に　向井啓二　龍谷史壇　七五

成島柳北における忠誠意識　乾照夫　『近代日本形成過程の研究』

明六社の創立と「明六雑誌」による啓蒙活動の展開　影山昇　愛媛大学教育学部紀要　第一部教育科学　二四

中村敬宇の学問―道徳知と啓蒙知　荻原隆　早稲田政治公法研究　七

西周における啓蒙思想の形成と展開―明治啓蒙思想研究序説（一）　米原謙　阪大法学一〇八

井上毅の教育思想―国体教育主義の形成　野口伐名　弘前大学教育学部紀要　三九

井上毅の教育思想　本山幸彦　季刊日本思想史　七

薩摩の教育　芳即正　教育と医学二六

国定教科書にみる吉田松陰―松陰像の変遷をめぐる一側面　大塚英明　歴史学論文集（日大）

戊申詔書と教育　尾崎ムゲン　季刊日本思想史　七

近代日本における教育農場の展開―三―教育農場の原点・北海道家庭学校の場合―留岡幸助・清男の教育思想とその実践　石原秀志　茨城大学教育学部紀要　教育科学　二七

戦前日本における中国人留学生予備教育の成立と展開　二見剛史　国立教育研究所紀要　九四

日露戦後における農村振興と農民教化（Ⅱ）―福島県南会津郡伊北村（現只見町）の地方改良運動　不破和彦　研究年報（東北大・教育）二六

国民学校低学年理科における教育内容・方法及び自然観の検討―教師用書「自然の観察」の分析を通して　三石初雄　人文学報（東京都立大・人文学会編）一三〇

「小学国語読本（通称サクラ本）」における自然観・死生観について　木下政久　教育研究　二二

製糸女工と学校教育―平野村における工場法施行とのかかわりで　花井信　日本史研究　一九一

バジョットと進化論　吉田忠　日本文化研究施設研究報告　一四

細川瀏覚え書き　大木基子　季刊日本思想史　七

明治末期の徳育論議―大逆事件後の帝国議会　梶山雅史　季刊日本思想史　七

逆対応と平常底―西田哲学の宗教理解について　上田閑照　理想　五三六

昭和六年頃の西田哲学　野田又夫　〃

西田哲学における現実世界の根本構造―「時間」の問題をめぐって　関根靖光　〃

場所的キリスト教神学への一試論―西田哲学とカトリシズム　本多正昭　〃

西田哲学における場所の思想　阿部正雄　〃　五三七

西田幾多郎宛て雪門老師、フッサール、リッケルトの書簡各一通、その他—附、藤岡作太郎宛書簡二通　下村寅太郎　思想　六四七

初期田辺哲学の形成—大正思想史のこころみ　渡辺和靖　愛知教育大学研究報告　第一部人文科学・社会科学　二七

「あるがまま」の視界　矢野敦子　待兼山論叢一一（日本学篇）

伊波普猶論　比屋根照夫　季刊日本思想史　七

和辻哲郎の風土理論　高橋文博　岡山大学教養部紀要　一四

俗間信仰とキリスト教—維新期浦上キリシタンの場合—　森岡清美　季刊日本思想史　六

岩倉使節団における宗教問題—「米欧回覧実記」に見える宗教観　山崎渾子　北大史学　一八

排耶論にみる明治前半期の真宗—護国論の展開と国粋主義　上場顕雄　仏教史学研究　二〇—二

近代日本の民衆宗教　村上重良　現代の眼　一九—三

清沢満之の主題と方法—四—　出雲路暢良　金沢大学教育学部紀要　人文・社会・教育科学編　二六

植村正久と金森通倫—「新神学」問題を中心に—　田代和久　日本思想史学　一〇

「内村鑑三不敬事件」と植村正久　田代和久　季刊日本思想史　七

明治二十九年第二高等学校不敬事件—新聞資料による一考察　工藤英一　明治学院論叢　二六一

日本キリスト教史における進化論の問題—内村鑑三を中心にして—　大内三郎　東北大日本文化研究所・研究報告　一四

志賀直哉と内村鑑三　柳田知常　金城国文　五四

明治期の小学校教育におけるキリスト教の規制　高木一雄　歴史手帖六—二

大正期における倫理・宗教思想の展開—七—帆足理一郎の初期論文をめぐって　峰島旭雄　早稲田商学　二七二

欧化主義期における唱歌教育の実態—唱歌と猥歌追放論　松下直子　武蔵野音楽大学研究紀要　一一

自然主義の日本型と西欧型—花袋、ゾラ、ムアなど　長崎勇一　大東文化大学英米文学論叢　九

『近代思想』期の荒畑寒村—その思想と文学の検討—　荻野富士夫　日本史研究　一九二

大正期の仏教と民衆文学—暁烏敏と喜多一二　宮本又久　金沢大学教育学部紀要　人文・社会・教育科学編　二六

「西郷南洲遺訓」　古川哲史　理想　五三七

澤周『中国の近代化と明治維新』　中村義彦　歴史学研究　四五五

藤井貞文著『明治国学発生史の研究』　上田賢治　国史学　一〇四

ひろたまさき著『福沢諭吉研究』　鹿野政直　史林　六一―二

エルンスト・ロコヴァント著『明治時代前半（一八六八―一八九〇年）における国家神道の法制的発展』　小川信　国学院雑誌　七九―二

家永三郎『歴史のなかの憲法』上・下　杉原泰雄　歴史学研究　四六一

大原慧著『幸徳秋水の思想と大逆事件』　橋本哲哉　歴史評論三四二

大原慧著『幸徳秋水の思想と大逆事件』　黒川俊雄　東京経済大学会誌　一〇八

帰鑾原理のシンボルとしての天皇―武田清子『天皇観の相剋』ほか　神島二郎　朝日ジャーナル　二〇―五一

「無教会二代目」の思想史的問題性―藤田若雄編著『内村鑑三を継承した人々』上・下　石田雄　思想　六五一

中野光著『大正デモクラシーと教育』　磯田一雄　教育学研究　四五―二

海原徹著『大正教育史の研究』　浜田陽太郎　〃　〃

野原四郎・松本新八郎・江口朴郎『近代日本における歴史学の発達』上・下　岩井忠熊　歴史評論三三四

鹿野政直・堀場清子著『高群逸枝』　西川祐子　日本史研究　一八九

斉藤之男著『日本農本主義研究―橘孝三郎の思想』　長幸男　社会経済史学　四三―五

松尾章一著『日本ファシズム史論』　君島和彦　歴史評論三三八

補遺

昭和五十二年

伊予国湯岡碑文と聖徳太子の仏教―一―　真流堅一　熊本大学教育学部紀要第二分冊人文科学　二六

「大日経開題」に示される空海の思想　小野塚幾澄　大正大学研究紀要文学部・仏教学部　六三

日本霊異記の思想と教訓　八木毅　愛知県立大学文学部論集国文学科編　二七

講義聞書にみられる明恵上人の思想―続―　田中久夫　千葉大学教育学部研究紀要第一部　二六

正法眼蔵の思想―道元の真理の主張　黒沢幸昭　山梨大学教育学部研究報告第一分冊　二八

度会西河原行忠の神道論　安津素彦　国学院大学日本文化研究所紀要　四〇

「女訓抄」の研究　青山忠一　二松学舎大学東洋学研究所集刊　八

本居宣長における注釈の意味するもの　野崎守英　哲学誌　二〇

「白鹿洞書院掲示」の諸藩校への定着とその実態　関山邦宏　教育研究　二一

海保青陵著作の成立年代　蔵並省自　日本大学文理学部（三島）研究年報　人文・社会科学編　二六

古賀侗菴の行実　松下忠　斯文　八一

頼山陽と橘守部に見る日本歴史学派的特質―同次元における異系統の展開　徳田進　高崎経済大学論集二〇（一～四）

日本科学史上における菅江真澄　内田ハチ　科学史研究　一二四

近世下野における農家家訓の成立と展開　入江宏　宇都宮大学教育学部紀要　第一部　二七

明治の思想について　石川正一　金沢経済大学論集　一一―二

後進近代化と哲学―明治初期における受容民権思想の辿る運命　小枚治　東京教育大学文学部紀要　哲学倫理学研究終刊号

福沢諭吉における「人権」および「政権」に関する一考察　松岡浩　法学研究（慶応大）五〇―一二

近代日本における宗教と国家―新渡戸稲造の場合　速水敏彦　キリスト教学　一九

内村鑑三の慈善思想―上―　遠藤興一　明治学院論叢　二六三

大正デモクラシーと公民教育の形成　森部英正　東京大学教育学部紀要　一七

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳蠲をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

日本思想史研究　第十三号

昭和五十六年三月十五日　印刷
昭和五十六年三月二十五日　発行

編集代表者　玉懸博之

印刷所　仙台市日の出町二丁目四ノ二　㈱仙台共同印刷

発行所　仙台市川内　東北大学文学部　日本思想史学研究室